

「……プ、プレゼント……?」

——グチュ。

ゆっくりと、内部から指が引き抜かれる。

その感覚に、涼真は思わず「んっ」と息を止めた。

「涼真くんのここ、すごい狭いからさ。いきなり俺の、入らないと思って」

そう言いながら、恒星は涼真を抱えたまま、ソファの下に置かれていた紙袋を持ち上げる。

いったい、何をくれるというのか。

酒で朦朧としたまま、恒星にもたれかかっていた涼真の視界に、ひっくり返された紙袋の中身が転がり出る。

「な、なに……」

ひくり、と喉が鳴った。

テーブルの上に転がったのは、ローターや、見たこともない形状のバイブ——  
明らかに大人向けの玩具だった。

「んー、どれがいいかなあ。涼真くんの、ここに入れるの」

そう言いながら、恒星はわざとらしく指を動かし、入口付近をくちくちと音を立てて弄る。

「あっ……や、やだ……」

身を振って逃げようとした瞬間、逃がさないと言わんばかりに、指がさらに深く押し込まれる。

「——ああっ！」

「ねえ、涼真くんはどれがいい？」

「んっ、ど、どれも……いやです……」

抱え込まれたまま、身動きが取れない。

役に入り込んだ恒星の気配は、どこか狂気じみっていて、懇願など通じない温度を帯びていた。

それでも、口にせずにはいられなかった。

「……もう、やめましょう……恒星さん……」

耳元で「ははっ」と笑い声が落ちる。

だが、腕が緩むどころか、むしろ強く抱き寄せられる。

「答えてよ。どれがいい？　これ、大きいけど……涼真くんのここ、入るかなあ？」

「む、無理です……」

泣き出しそうな声が、勝手に零れる。

涼真は無意識に、恒星の腕をぎゅっと掴んだ。

「んー……じゃあ、これ？ うわ、形えぐいね」

笑いながら見せられるそれは、大きくはないが、凹凸が目立つ。

どう考えても、受け入れられるものではない。

「……いやです……お願い……」

酒のせいで、頭も体も思うように動かない。

そのくせ、感情だけが過剰に揺れる。

怖さが込み上げ、目元が熱くなり、気づけば、涙がぽろぽろとこぼれていた。

「……やだ……」

「あーあ、泣いちゃった」

一瞬、これで我に返ってくれるのではないか――

そんな期待が、胸をよぎる。

けれど、恒星は楽しげに、涙に濡れた顔を見下ろすだけだった。

「泣いたって、離してあげないよ？ 決めないなら、俺が決めるけど」  
びくり、と体が震える。

「おっきいのは可哀想だからさ。じゃあ、このイボイボにしよっか？」

「あっ……や、やだ……」

「ほら、手、離して」

「やめてください……！」

小さく舌打ちが聞こえた。

緩んでいたネクタイを抜き取られ、両手首をまとめて掴まれる。

そのまま、体の前で縛られた。

「はい、足、開いて」

「ま、待って……！」

「大丈夫。ローションいっぱい塗ったから」

膝裏を持ち上げられ、上体が後ろへ傾く。

背後の恒星に体重を預けたまま、涼真の脚は大きく開かされる。

右脚は恒星の立てた膝に塞がれ、左脚は手で持ち上げられた状態だ。

——ぬるり。

先端が、押し当てられる。

「や……やだ……」

——つぷつ。

凹凸のある感触が、粘膜を押し広げるように入り込んでいく。

圧迫というより、内側をなぞられるような違和感が、じわりと残った。

「あっ……あっ……」

——チュクツ、チュクツ。

いやらしい速度で、恒星が出し入れを繰り返す。

そのたびに、涼真のどうしようもなく敏感な部分を掠めていく。

「大きさは……大丈夫そうだね。じゃあさ、ちょっと動かしてみよっか」

「あっ……や、やだっ、まっ——」

——カチリ。

小さな音が鳴った、次の瞬間。

内部に収められたそれが、低く唸るような音を立てて震え始める。

「——っ……あ、あ……ああっ♡ あああ——♡」

粘膜が、細かく震える。

その瞬間、ぞわりとした感覚が内側から一気に駆け巡り、涼真は思わず背中を大きく反らした。

「あっ♡ だめっ♡ 恒星さん、それ……ダメですっ……！ あっ♡」

「ダメって感じじゃ……ないけど？」

耳元で、くすりと笑う気配。

続いて、首筋に唇が触れ、ちゅつと皮膚が吸い上げられる。

その間も、手元のそれは、

逃げ場のない場所へと押し当てられたままだ。

逃し方のわからない感覚に、涼真は反射的に体を強張らせるが、身を振ることすら、許されない。



「あぁっ……！♡ 恒星さん……そこ、当てないでっ……！♡」

「……ここ？♡」

「あぁっ……！ だめ、そこ……♡ なんか……くる……うっ！♡」

「ここ、敏感にしておくとき。俺のちんこ入れたとき、気持ちいいから」

「あっ♡ ちんこ、入れませんっ♡ やめ、あっ、止めてっ、これ止めてっ——あっ♡」

「ちんこ入れるかどうか、これ止めるかどうか……決めるの、俺だから」

——カチ、カチ。

乾いた小さな音が重なり、途端に、内側の震えが一段と強まる。

それとほぼ同時に、快感の渦が背中を駆け上がり、涼真の身体が大きく跳ねた。

「あっ——あああぁあぁっ！♡」

——ビュクッ、ビュクッ！

腰が意思に反して前後し、先ほどよりも薄い白濁が前方に飛び散って、床を濡らす。

「うわ、すっご♡ 涼真くん、ちんこ触ってないのに、いっちゃったね♡」

なにがそんなに楽しいのか、恒星ははしゃぐように涼真を抱きしめ、身体をゆらゆらと揺らした。

「も、もう……抜いてっ……無理ですっ、んっ、んっ♡」

息も絶え絶えに訴えて、ようやく恒星がバイブのスイッチを切る。

震えは収まったはずなのに、内側に残った違和感が、淡い電流を流し続けているみたいで、身体はまだびくびくと震えていた。

「涼真くん、これ……気に入ったみたいだね？」

——クチ、クチ。

わざと内部で出し入れしながら、恒星が耳元で笑う。